
わたしのママとパパ

林田くう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしのママとパパ

【Nコード】

N4637Y

【作者名】

林田くう

【あらすじ】

「わたしのママとパパはすっごく、すんごく！らぶらぶです」
娘視点の両親のラブラブ劇だったりする。あの物語の続編・・・か！？

不定期に更新、バカ夫婦が見たい方はどうぞ。

（ラブラブすぎて見ての方が恥ずかしかったりする。）

今日は、桃のタルトを

「それじゃあ、行ってくる」

「いつてらっしやい」

ママとパパが行ってきますのチューをする。

「あー！あー！みいにも！！みいにもチューして！！」

パパはにつこりと微笑んでみいのほっぺにちゅーをする。

「えー！！なんで、ほっぺなのお？！」

ふんすかと怒ってみるけど、パパは微笑んだまま唇に手を当てて

「唇は、ママとだけだからね」

「もう！パパったら・・・！！」

そうゆうママもなんだか嬉しそうで、なんかムカムカ・・・

「ママ、ほっぺが赤くなってるよ・・・」

ちよっと、意地悪でいってみただけなのにママったら、ほっぺを両手で隠して

「えー！！」

「む？ママ、嬉しいのか・・・？なら、もう一度してあげようか・・・」

「もう！！パパは早く行かないと遅刻しますよ！！」

「しかたない・・・では、行ってくる」

「「行つてらっしゃーい！！」」

パパは笑ってお家を出たると、隣で手を振っていたママは「よし。」とか、言ってみいのお弁当を作りに行った。

「まやちゃん、おはよう」

「みつちゃん！！おはよー。」

この子は、お友達のまやちゃん。みいととっても仲良し！！

「昨日のドラマみたあ？」

「ううん。見たかったんだけどね。ママたちがさあ、早く寝なさいって」

「まやも！まやも！！」

「ずるいよねー、ママたちは遅くまでおきてるのにい」

でも、時々ヘンな音がするんだよね。

ママたちに言ったら、気のせいってゆーけど、ママの様子が可笑しかったから、絶対何かあるもん！！

「でも、みっちゃんのパパってカッコイイよね！！いいなあ」

「でも、パパ、ママが大好きだからいつもみいとママの奪い合いしてるよー」

「ほんとー？」

だって、みいがパパのお嫁さんになりたいっていったら、「パパはママが好きだからダメ」ってゆーもん。

「そーいえば、みっちゃんのパパの名前ってなあに??」

「んーとね。晴彦だよ！！はるひ」

夜・・・

「佐山君！！今日は飲んで帰らないか？」

「すみません。娘と妻が待っているので」

「ははあー。佐山君の愛妻家は筋金入りだな。」

「すみません」

「いやいや、奥方を大切にするのはいいことだ」

「では、失礼します。」

「ああ。」

今日は暖かいな・・・。

「ケーキでも買っていくか・・・」

やはり、ここは定番のショートケーキか・・・。

でも、ママはタルトやパイが好きだから、どちらかにしよう・・・。

あー、だが、みいは・・・。

まあいい。桃のタルトにしよう。

今日は、桃のタルトを（後書き）

パパの優先順位が・・・。（普通逆だよね）

しょうがないから・前編

「もー！ー！！パパばかりずるい！ー！！」

「当たり前だ。ママはパパのものだからな」

ずるいよ！！パパ昨日もママの隣で寝てたじゃんか！！普通、みいが隣で寝るのに！！

布団の上で3人正座して、ママの取り合いっこ。

「やだやだやだあー！！パパ、ママにべったりしすぎ！！今日だってみいの好きなショートケーキじゃなくて、ママの好きなタルト買ってきたじゃんかあー！！」

「その何が悪い」

「普通、みいが優先でしょー！！」

「誰がそんなこと決めたんだ」

あー！ー！！！！あーいえば、こっいうー！！

みいは、悔しくて目じりに涙を溜めて反論した。

「だって、まやちゃんのお家だって、ママと一緒に寝るってゆってたもん！ー！！」

「うちは、まやちゃんの家ではない」

「う・・・うわぁーん！！！！もう！！パパなんか大っ嫌い！！」
泣き叫んで、ママにしがみつく。

「もう、パパ。大人気ないですよ」

「ば、パパは別に・・・」

「うわぁーん、ぁーん！！」

「ほら。」

ママはみいをしっかりと抱きしめて赤子のようにあやしてくれる。

でも、それを見たパパは一気に不機嫌な顔になって

「じゃあいい。パパは自分の部屋で寝る」

そのまま、寝室を出て行った。

よっしゃー！！！！

みいは心の中でガッツポーズをした。

やったぁー！！！！パパがどっか行った！！やった、やった、
ママと寝れるうー。

「もう・・・じゃあ、みいはママと寝よっか」

「うん！ー！！」

いししし……。なんだか、今日はテンション上がるなあ

やっと、ママと寝れたんだもん！！嬉しくて嬉しくて……。へへ

あー！！パパが起きてきた

「パパ、おはよう」

「ああ」

……。あれ？

ママとみいの頭上に？マークが浮かぶ。

おかしいなあ……。いつもなら「おはよう、ママ。今日もかわいいよ」

とか言っつて、おはようのチューをするのに、今日は返事をするどころかチューもしないなんて……

パパ、怒ってるのかなあ……。いやー！！でも、今回は絶対、ぜー
ー！！ったい、パパが悪いもん！！

ママのほづをチラッと見れば、

これは・・・ヤバイ。

と言った凄まじい剣幕でパパを見ていた。

「ごちそうさま」

いつもなら、「ごちそうさま、ママの料理は相変わらずおいしいよ」とか言うのに・・・

嘘でしょ……。パパなんかおかしい！！

いや、違う違う……。普通がこれなんだ！！パパがちょっと特殊なだけで、世間ではこうなんだよ！！うん。だまされちゃだめだ。絶対に謝らないもん！！

「では、いつてくる」

「あ・・・」

いつものようにママは玄関までお見送りに行くけど、パパは何もないうちにさっさと家を出てしまった。

玄関で呆然と立ちすくむママ。

「・・・ママ？」

「あー！！・・・あ、そうね。お弁当つくら・・・」

・・・？ママ？

ママの視線の先が気になってその方向を見てみると、テーブルの上には今までかかすことのなかったパパのお弁当が置いてあった。

「・・・。」

「あ・・・の。ママ・・・？」

「あー・・・うん。お弁当ね・・・。」

ママ、悲しそう・・・？

足取りがなんだかふわふわしてて・・・

どうしよう。。。どうしよう・・・

とんでもないことになっちゃった！！！！

しょうがないから・前編（後書き）

パパ・・・大人げ、なさすぎでしょ・・・。

しょうがないから・後編

「おはようー。．．．？あれ？みつちゃん、元気ないね。どうしたの？」

「．．．パパとケンカしたの」

「どーして？」

「．．．。」

パパが悪いんだもん。

みいは。全然。悪くないもん．．．。

「みつちゃん．．．？ないてるの？」

ざわざわと、同じさくら組の子が「どうしたの？」と、近寄ってくる。

「う．．．。ん．．．」

必死に涙をこらえているが、先生がくると我慢せずにはいられなかった。

「せんせー！どうしょお「．．．」

「みくちゃん？ちょっと図書館いこっか？」

みいは、先生に連れられ図書館に行った。今の時間は誰もいない。

「みくちゃん、どうして泣いてるのかなあ？」

「みいの・・・せいで・・・。ママとパパが・・・。」

そこからは、喉がつまりいえない様子だった。

「どうする？おうちに帰る？」

「わかんないよお」

「んー。じゃあ、みくちゃんのママとパパはどんなことでケンカしたの？」

「う。ひっぐ・・・えと・・・。」

言おうとした瞬間、あの時の記憶がよみがえり、また泣き出してしまった。

このまま、ママとパパが『リコン』しちゃったら、どーしよう。みい、絶対嫌われるう・・・。

「とりあえず、今日はおうちに帰ってママとおはなししようか？」

「すみません。ちょっとささいなことで・・・」

「そうですか。とりあえず、お家で話し合ってみて下さいね」

ママが、幼稚園にお迎えに来てみいは、帰ることになった。

自転車の後ろに乗りママの背中にぎゅっとしがみついた。

「パパ、怒ってるよね」

「すねてるだけよ」

「だって・・・」

朝、全然へんだったもん。絶対、絶対怒ってるもん。

「ママ、あのね・・・」

たぶん、こうしたらゆるしてくれるよね・・・。

やはり、昨日は大人げがなさ過ぎたか・・・。

夜、パパは色々考えながら帰り道を歩いていた。

みいは、まだ子供だしそんな子供とママを巡ってケンカしたなどと

こんな話があるわけがない……。謝ろう。うん。

そして、意を決して扉を開けた。

「ただいま」

ガチャリという音がして、扉が開く。

「お帰りなさい」

玄関に立っていたのは、ママだけであつた。

「あれ？みいはどうしたんだ」

「伝言を預かっていますよ。『しょうがないから今日のところはパパに譲ってやる』ですって」

「……。みいが」

「パパなんか大っ嫌い！！！！」

などと、言っていたのに。

パパの口元に笑みが綻ぶ。

「そうか……。では、今日はどこにいるのだ？」

「おばあちゃんの家泊まるんですって。」

「……。なるほど」

突然、パパの笑みが妖しくなり、それに気づいたママは、後ずさる。

「そうだ、ママ。今日の朝の口付けがまだだったね」

「え？あー・・・そうだったかしら？」

パパの目線から逃げるが、後頭部をつかまれ、濃厚なキスを受ける。

「う・・・はぁん」

「逃げて、ダメだよ。千代・・・」

「うう・・・。」

「久しぶりに一緒にお風呂にでも入ろうか」

お姫様抱っこをされ、風呂場へ直行する。

ママも、抵抗はしているがパパはちょーのつくご機嫌さんだったので、なすすべもなかった。

そのあと、ママはパパに捕食されました。

しょうがないから・後編（後書き）

パパ・・・。あなたって人は・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4637y/>

わたしのママとパパ

2011年11月17日17時17分発行